

障害者にとっての交通環境

—その問題点と改善策—

秋山ちえ子* 岡 並木**
木下 茂徳*** 田島大策****

わが国の障害者に対する交通環境の改善は、形だけをとってみれば、いまや世界の先端に位置しているといえる。しかし、個々の施策を見ていくと、そこには単に形だけを整えて、障害者が使用する場合の配慮に欠け、せっかくの施設も有効に生かされていないものが多い。とくに指摘されたのは、障害者との心の触れあいが少ないために起こる、様々な誤解や偏見、過保護的接し方による弊害である。障害者対策の根本は、障害者の立場を理解し、触れあうチャンスを幼児からの教育を含めて、広げていくことにあろう。

Traffic Systems and Facilities for the Handicapped

— Problems and Improvements —

Chieko AKIYAMA* Namiki OKA**

Shigenori KINOSHITA*** Daisaku TAJIMA****

Traffic systems for the handicapped in Japan have been improved recently and Japan is now in the van of the world in this field when we only look at the external form of the improvements. However, when we view closely each policy on the traffic systems for the handicapped, these facilities have no regard for the users themselves. Therefore, even though there are many facilities, they were not put to good use. In this discussion, we pointed out that there are all sorts of misunderstandings and biased views caused by lack of full communication between healthy people and the handicapped. There are also evils caused by overprotective attendance to the handicapped. The fundamental problems of traffic systems for the handicapped can only be solved when we understand the viewpoints of the handicapped and make opportunities to commune with the handicapped through education from infancy.

報告①

障害者の立場に立った施策の不足

報告者…… 田 島 大 策

私は中途失明ですので、本日のテーマに果たして適しているかどうか、やや心配です。

目が悪くなり始めたのは昭和38年です。目がチラチラするので病院に行きましたら、ペーチェット病

と診断されました。いまま難病の一つであるペーチェット病ということで、ゆくゆくは失明することは覚悟していました。46年に完全に見えなくなりましたので、早速盲導犬を頼みまして、以来ずっと盲導犬と一緒に行動してきましたから、歩くことに関しては、あまり不便を感じなかったわけです。最近はその盲導犬が年をとって、動けなくなったものから、この3月からはほとんど外出していません。

身体障害者の交通問題といいますが、盲人とその他の車いすのような方とは、大きな違いがあると思います。例えば、これは5～6年前に問題になりましたが、車いすの人のために歩道の縁石を削って、スロープ状態にするときに、盲人の人には、むしろ縁に段差があったほうがいいわけです。そこで双方が話し合って、大体2cmぐらいの高さの角を残すことで解決したことがあります。

*評論家
Commentator

**朝日新聞社編集委員
Senior Editorial Writer, Asahi Shimbun Press

***日本大学教授(建築学)
Professor, Nihon University

****評論家
Commentator
昭和56年6月11日実施

こうした交通施設の問題で感じることは、いわゆるお役所仕事におわってしまい、根本的には、使う人の立場に立ってつくる姿勢が不足していることです。例えば、私が盲導犬を使って歩くときに、車道とガードレールで区切られた歩道は非常に歩きにくい。電柱がある、標識がある、ひどいところでは街路樹があるで、盲人ばかりでなく、車いすの方も通れない場合があります。それで、私の知っている盲人は、ガードレールの外側のほうが安全だというぐらいです。いろいろな施設を完備したとしても、どこかで使う人への配慮が欠けている。これは結局、心の問題だという気がつくづくしています。行政だけでなく、住民それぞれが考えていかないと解決しない問題ではないでしょうか。

もう一つは、一般の人には非常に便利であっても、障害者にはマイナスになるという点もあります。詳しくは討論の中で述べますが、こうしたことを考えると、施設などをつくるときは、事前に身障者と話し合う形をとらなければ、問題は解決していかないと思います。

報告②

施設を生かすものは障害者との心の連帯

報告者…… 木 下 茂 徳

福祉の問題に数十年来かかわってきた立場からいいますと、障害者対策は交通問題も含めて、20年前に比べれば雲泥の差といっていいほど充実してきたと思います。しかし、気になることは、日本人の気質なのかしれませんが、どうも形にこだわって、心のほうがおろそかになっている面があります。

形の上では、確かにいいもののがかなりありますが、実際に障害者が利用する立場に立っているかどうか、首を傾けたくなるものが出てきます。例えば、ガードレールひとつとっても、プレス型のガードレールは歩行者側が切り落としになったままで、ヤスリを当てていません。ですから、車いすの人や盲人が狭いところを通ると、手が切り落としのところにつかかって、スパッと切れたりすることがよくあります。そこで、ガードレールの切り落としは車道側にすべきだという意見が出てきます。

このように、いわれてみればなるほど、というものがいくつもあります。パイプ型のガードレールにしても、歩道側にナットをとめているから、やはり

こすったり、ぶつかったりして傷つく。ガードレールは本当に歩行者を保護しているのか、そのあたりが不徹底なわけです。障害者の方がわれわれの生活圈の中で一緒に生活している、という実態をよくつかんでいけば、ガードレールひとつ作るにしても、いろいろと考えるべき問題がたくさん出てきます。そのあたりの詰めが、どうも日本は不十分で、とにかく作ればいいという方向にいきやすい。

それから、視力障害者のための点字ブロック、誘導ブロックと称するものが、いいものなのか悪いのか、田島さんにお聞きしたい。こうしたものが日本の状況の中で、たくさん設置されるようになってきたこと自体は、別に悪いとはいえないと思います。ただ、京都市で問題が起こったのは、設置の基準が国と市で違うために、視力障害者の方が止まるのか、進んでいいのか、迷ってしまったことです。これは京都市のほうが国よりも設置が先行して、国が後から追いかける形になったためです。このように、障害者のために全国的に統一した町づくりをしようと思っても、行政が縦割りでズタズタになっていますから、なかなか難しい面も出てくるわけです。

また、もっと身近な問題としては、点字ブロック、誘導ブロックの上に放置自転車がかかっているために、ブロックを伝わって歩いて来た人が、自転車にぶつかって転倒する例が、ずいぶんあります。そうしますと、放置自転車を取締まる方法がないならば、ブロックに頼っていたら危くて仕方ないと考えるのは当然です。

それから、商店街の歩道も問題があります。先日も高円寺（東京）で撮影してきましたが、車道と歩道の区別をラインを引いて示してあるわけです。ところが、そのラインいっばいに、それぞれの店が商品や物を出して、そのラインを伝って歩く視力障害者の方たちは、車道の側にはみ出て歩かざるを得なくされています。こうした状況に対する警察や公安委員会の取締りや指導も、どうも不徹底で、いっこうに改まる気配がない。

ですから、いかに立派な誘導ブロックが設けられ、それについての細かな指示がなされても、現実にはブロックの上に自転車や品物が置かれて、それを取締まることもしないという形で、施設は整っても障害者にとって歩きにくい町がふえてしまっています。

交通機関については、やはり障害者の方の生活圈を拡大し、自由な生活を営むためには、交通手段の確保が大切です。周囲の人がちょっとしたケアを

してあげれば、あらゆる種類の障害者が乗りこなせるような交通のシステムをつくらなくてはいけない。システムといっても、そう難しいことではありません。障害者にとって制約となるような条件は、できるだけ直しておき、それでもカバーできないところを、周囲の人がさりげなく手を差し伸べてあげることで、障害者の移動をスムーズにするシステムです。

結局、交通システムにしても誘導ブロックにしても、それを有効にするものは、障害者との心の連帯意識であり、われわれ住民の問題になってくると思います。

報告③

教育に不足する障害者との触れあい

報告者…… 秋山ちえ子

戦前と戦後の障害者の人たちを比べますと、戦前は、障害者が隠されるというか、社会へ出ていくことが非常に少なかったわけです。戦後は、重症の子をもつ親たちから、一人で悲しんでいないでみんなて話し合っていこうという傾向が出てきて、急速に外に向かって活動するようになってきました。障害者が外に出てきたことは、非常に画期的なことだと思います。

今年は国際障害者年で、「完全参加と平等」がテーマですが、それを実現するためには、障害者に対する基本的認識が確立してはなりません。それは、簡単にいえば、障害者はたまたまどこかに障害を持っているが、みんなと同じ人間で、日本なら日本人であって、喜びも悲しみもみんなと同じだということです。この認識がなければ、すべてのことは解決できないと思います。そのためには、障害者の方がもっと外へ出てくるとともに、出てこられるようにして、私たちと触れ合ったり、見つめ合ったりすることが必要です。

私は、もう何十年も障害者の問題とかかわっていますが、最近になってやっと障害者の方の中へ、一歩突っ込んで入っていけるようになりました。今日も、田島さんが、盲導犬が病気になったとかで、お一人で白杖も持たずにいるので、私にできることは何かかがって見たんです。そうしましたら、私が田島さんの左側に立ち、田島さんの左手が私の右肩につかまりながら、私が一歩先を歩いてくれると歩きやすいというので、一緒に歩いたわけです。盲導

犬のかわりをしたのですが、田島さんに、この盲導犬は訓練が足りないといわれました（笑）。私は、田島さんに対して自然とものがいえるようになった自分、また、田島さんも私に打ち解けていただいた、ということが非常にうれしいわけです。やはり、障害者を遠くから見て、お気の毒なんて同情しているうちは、本当にいい対策はできないと思います。

お役所の仕事も、障害者を大事に守ろうという意識が強すぎて、まるでハレモノにさわるような態度で接していて、そこが逆におかしくなっているようです。今年の初めに北海道で障害者の方の会があったんですが、受付から何からすべて役所の人がやっちゃって、障害者の方は誰も働いていない。そこで、受付ぐらいしてもらったらどうですかといますと、「お転びになって、おケガされたら大変です」というわけです。障害者の方が来ると、上座にすわらせてしまう。保護しておけば無難だという態度ですけど、私はそうではないと思います。

障害者だって健常者と同じように転ぶし、ケガして血が出ることもあります。そのときは起こしてあげる、血をふいてあげる、それでいいわけです。それを怖れて、遠くから同情するだけでは、何も解決しないんです。

いま大変売れている黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』には、そうした障害者との触れ合いの大切さがいろいろと出てきます。運動会のときに、骨の病気で背が伸びない小さな子が必ず一等になるような競技を入れるわけです。コイのほりのシッポから入って口から出てくるなんていうのは、一番小さい子が一番早くなるから、まわりの子があの子に負けるなといいながら、その子を尊敬したというんです。また、とても仲のよい小児麻痺の子に、自分の大好きな木登りをさせたいと思って、夏休みに一所懸命にその子のお尻を上げたりして、いろいろ苦勞の末、ようやく二人で低い枝に登って、顔を見合わせて「こんにちは」と言ったときの感動は忘れられません、って書いています。

私は、障害者との触れ合いをめざす「われら人間コンサート」をやっていますが、あの忙しい黒柳さんが必ず出てきます。「なぜ」って聞きますと、「もしかしたら小学校のときの影響かもしれない」というんです。そうなりますと、障害を持った人と健常者が触れ合ったりするのは、子どものときからの教育の問題になってくるかもしれません。

お役所のすることは、記録によく残るようなこと

しかしません。それはそれぞれお金のかかる、大変なことをしているわけですが、報告②のガードレールのようなものについていえるような人、お役所仕事に温い血を通わせることのできる人たちが、たくさんいることが大事です。そのためには、役人にすべ

てをやれといっても、それは無理なことですから、小さいころから障害を持っている人や子どもたちと一緒に遊ぶ、接することが非常に重要になってきます。日本ではその根本のところ欠けていると思います。

● 討論

1. 望まれる障害者との事前の話し合い

岡(司会) いまの3人の方の報告に共通していることは、障害者対策が形だけにとられ過ぎて、そこに心が通っていないということだと思います。その例として、歩道の縁石を削ったり、点字ブロックの話が出てきたんですが、外国をあちこち見てこられた秋山さん、外国の都市には、こんなに備えのあるところがありますか。

秋山 ありませんね。オーストラリアで、「フェスピック」という、南太平洋アジア身体障害者スポーツ大会が開かれたときに行ってきましたが、まず驚いたのが、歩道の縁石を切っていないことです。オーストラリアは福祉の進んでいる国なのに、なぜ切らないんですかって聞きましたら、車いすで登れないで困っている人がいたら、近くにいる人が手助けして持ち上げるし、車いすの人も、「すいません、ここだけちょっと上げてください」というから、と答えるんですね。また、目の不自由な方には歩道の段差があるほうが、歩道とわかってよしい、と平気で答えます。これ、最近の話ですよ。

岡 この間もアメリカ人が来て、日本はどこも車いす用に歩道の縁を切っているから、福祉国家だという。確かに、形だけ見たらこれほどの福祉国家は外にないような気がします。

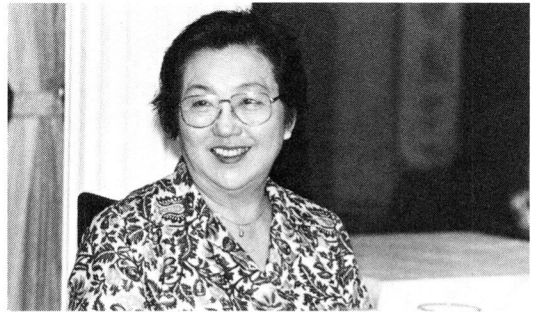
秋山 そこが心配なんです。例えば、障害者である八代英太さんを国会の場へ送り出したら、そのとたん国鉄が障害者用のエレベーターをつくるというんです。その費用が1億円とかいう。赤字の国鉄がそんなことをする必要はないんで、荷物用のエレベーターや昇降機のリフトを、もう少し安全の工夫をして使えばいいんです。ところが大金をかけて立派なエレベーターをつくり、すぐほかがマネをするわけです。

岡 木下さんはこの風潮をどうごらんになりますか。

木下 すべてを物で解決する、物が先行するとなると、どうしても心がついていきません。基本的には、小学校あるいは幼稚園からの教育の充実に意を注い

でもらいたいと思います。もちろん、物でカバーしなくてはならない最低限のことは、全部やってあげたい話ですが……。

秋山 障害者自身が、それはおかしい、と外へ出て言うことが大事ですね。国鉄の駅に最初の障害者用トイレができたとき、2時間前に電話で予約しない



秋山ちえ子氏

とカギを開けないというし、せっかくつくったエレベーターも電話予約が必要だったのです。障害者が、そんなバカなことがあるか、と抗議してようやく改善されました。お役人たちが予測を立てて一所懸命取り組んでも、かえってもったいないお金を使ってしまうことがありますから、障害者が自分の意見をキチンということが、とても大切です。

田島 しかし一方で、政府あるいはマスコミにしても、障害者の言動に対して、ハレモノにさわるようなところがあります。障害者の話筋に筋の通らないことがあれば、間違っているといえればいいと思いますが、そこをいわない。そして、非常に拙速に、何かいいわけのために設備をつくらしたりするわけです。あしたものは、スロー・バット・ステディで、いろいろな方面からじっくり検討して、それから実行すればいいと思います。

最近、駅のアナウンスがうるさすぎるというので、国鉄がサイレントタイムのテストをしているようですが、目の見えない人で赤羽から高田馬場まで通っている人に聞いたら、これは非常に不安だといま

すね。盲人は聴覚と触覚で動いていますから、雨とか風の日で電車の入ってくる音が聞こえないときには、アナウンスがないといつ電車が入ってくるかわからないわけですね。それから、どこ行きということも、アナウンスがないとわからない。ですから、もしサイレントタイムがあちこの駅に広がるようでしたら、一度話し合わないといけないでしょうね。これについては、国鉄から盲人団体に何の連絡もないそうです。

秋山 悪気じゃなくて、気がつかないんですよ。だから、いわないといけないんです。

田島 ほくも目が見えなくなって、こうしたちょっとしたことが、移動する場合に大変な障害になることがわかりました。

2. 細かな配慮に欠ける施設整備

岡 意外な障害とは何でしたか。

田島 一番感じたことは、歩道の上のいろいろなものがあることですね。木下さんが報告されていましたが、日本の商店は歩道を自分の物置きと心得ているとしか思えません。盲導犬を連れていけばまだ助かりますが、白杖一本で歩いている方には、ものすごい障害でしょうね。それからおかしいのは、歩道の真ん中に電柱が立っていることです。どうして、あんなところに立てるのですかね。

岡 目の見えていたときは、あまり気になりませんでしたか。



岡 並木氏

田島 ええ、気にならなかったですね。それから、階段が非常に気になります。階段がああ辺にあるとわかっていればいいのですが、予測のつかない場所は、どこから階段が始まるのかわからないと不安を感じます。とくに下りの階段は、ものすごく怖い。ですから、階段の始まる30cm前なら30cm前に、点字ブロックみたいなものがあると、大変助かります。もちろん、これも様式が全国的に統一されていない

とどうしようもありません。

秋山 階段は1段階みはずしても捻挫しますから、この階段はあと3段で終わりという段に、全国統一の点字ブロックがあるといいですね。

田島 東京の国鉄のプラットホームにある点字ブロックは、とても安らぎになります。その外に出なければ安全ということですから。ただ、駅によってやってあるところとないところがあるし、また、同じ駅でも、プラットホームの中央付近には点字ブロックがあるが、前方にはないところがあります。これはかえって危ないんです。

岡 点字ブロックがあればそれに頼るから、やるなら全部やらないと危険ですね。

田島 点字ブロックがあるから、向こうにもあるだろうと思って、探しながら行ったら線路へ落ちたという人もいます。

秋山 目の見えない人でも、勤のいい人と悪い人、先天的失明と、中途失明ではやはり違いますか。

田島 かなり違います。壁を伝っていないと歩けない人もいれば、白杖なしでタッタッと歩く人もいます。そういうタッタッと歩ける人を基準にして、もの考えてもらうと困るわけです。

岡 人によって、ずいぶん違うようですね。歩道の縁石を削って2cmの段差にしても、越えることのできない車いすの人がたくさんいるようです。2cmの段差を越えられるような人は、15cmでも越えられるといえますね。そういう人はパラリンピックに出られるような、上半身に障害のない人で、上半身が弱い人は2cmの段差でも、大変な壁になるそうです。われわれは車いすの利用者ということで、みんな一緒に考えてしまいがちですが、あの歩道の縁を削るときは、車いすの患者の中でも条件の悪い人のことを全く念頭に入れてなかったという話です。

田島 周囲の人に思いやりの心があれば、お金を使って歩道を切るようなことをする必要はないんです。私の知人で、小学校2年生の子をもつ目の見えない母親がいます。盲導犬協会などで時どき顔を合わせると、子供さんを連れてきているわけです。それで、ぼくがトイレに立とうとすると、その子がスッとそばに来て、トイレまで連れて行って、帰るのもちゃんと待って、戻してくれるんです。母親が目が見えないから、自然にそうした教育が身についているんですね。やはり小さいときからの教育が大切だと思います。

秋山 教育とともに、障害者の方も、自分が困って

いるときは、ちょっと手を貸してください、と気軽にいってほしいですね。困っていることを周囲の人が察するべきだ、もっと親切にすべきだと思われる、これは大変なことですから。私は、よく障害児の母親にいます。「あなたのお子さんは、一生障害が直らないということを、まず考えなさい。そうしたら、障害をもって生きるためにはどういうしつけをしたらいいのか、おのずとわかってくるはず。健康児以上に謙虚でやさしく、感謝の心を持ち、勤勉である子ども、そして、困っているときは素直に助けてくださいをいえ、がんばるときはがんばれるような子どもに育てないと、この世の中で生きていけませんよ。かわいそうにと甘やかしてはダメになってしまうですよ」というんです。

田島 障害者の大部分は、やはり手を貸してください、という人だと思います。自分でやれることは自分でやるようにして、困ったときは素直に助けてほしいといえればいいんですが、ひがみっぽくなっている面はありますね。

秋山 そうですか。

田島 私も、前にできたことができなくなるわけですから、ひがみっぽくなってますよ。その気持ちわかります。ボランティアの奥さんと、手を貸しましょうかといったら、いらぬ世話を焼くみたいなことをいわれて、声をかけてはいけないんでしょうか、と聞かれたことがあります。

岡 木下さんは仕事上、いろいろな障害者の方とお付き合いがあると思います。いまのような話はどのように思われますか。

木下 ひと昔前に比べたら、ずいぶん変わってきたと思います。若い方が積極的に発言するようになりましたからね。恐らく、50代以上の障害者の方と、いまの20代、30代の障害者では、かなり違いがあります。

秋山 全くといっていいほど違いますね。

木下 体験談などもあからさまに話してもらえますね。昔だったら、そこに壁があって、何か障子をはさんで、遠慮がちに聞くような感じさえありました。いまは、そんな感じは全くありません。調査でも、昔はよく拒否されましたが、いまは非常に協力してくれます。世の中の意識が変わってきたという感じがします。

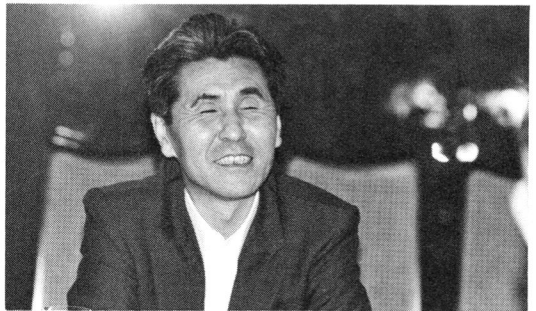
3. 障害者との心のふれあいが基本

秋山 健常者のほうでは、いまだに健常者が勝手に

察して、こうすればいいだろう式の接し方が多過ぎますね。例えば、一昨年に高校生18人、社会人6人の計24人の盲人の方とハワイへ行ったんですが、航空会社は乗員を余分に1人ふやすというわけです。こちらは先生方とか親、私など7人ぐらいが付添っているし、みんな目が見えなくても自分で何でもできるから、大丈夫ですといっても、ものすごく慎重に接するんですね。食事のときでも「切って差しあげます」といって、余分に買ったスチュワーデスが肉などを切ってくれるわけです。後で高校生が、「フォークがどこにあるか教えてくれれば、後は自分でやるのに、余計なお節介して」というから、「自分でみんなできますよ、なぜ素直にいわないの」と怒ったんです。しかし、あまり大事に、大事に扱うだけでは、障害者にとって必ずしもよくない。それよりも、障害者が飛行機に乗ったときはどうすべきか、その基本的な対処の仕方をきちんとつくっておくことが大切だと思いますね。

岡 先ほどの北海道の話で、障害者に受付さえもさせなかった例と相通じますね。一見、非常に思いやりがあるように見えて、逆にいえば、健常者の恩恵にすぎなくなってしまう。それではダメですね。

田島 そういう過保護の例は、私にもあります。3～4年前に盲導犬協会に常陸宮御夫妻が見えられて、私も呼ばれて行くことになったんですが、ちょうど



田島大策氏

ラッシュアワーにぶつかる。それで逆方向から行こうと思って、駅に逆方向はすいているかどうか問い合わせたら、これが大変なことになって、駅に駅員が3人ぐらい出迎えている。こちらは盲導犬がいるから、すいていたら自分で行くといっても、3人が付添って、おまけに、前の電車を止めて待っているわけ。まるで宮様並みでしたね(笑)。

秋山 本当に過保護ね。どう扱っていいか、その基本が全くわかっていないのね。これも航空会社の例ですけど、普通の車いすは貨物のほうに乗せられて、

客席には乗せてくれないでしょう。それで、機内の通路も通れる折りたたみの軽い車いすを試作して、乗せてほしいと各航空会社に頼んだんですけど、車いすが1つ入るごとに乗員を1人ふやさないといけないとか、乗員組合との交渉が大変だからとかいって、乗せてくれないんです。その障害者に付添いがいけば、乗員を1人ふやさなくていいと思うし、そのあたりを、勺子定規に考えずに、もっと障害者と話し合っしてほしいと思いますね。実際、向こうで勝手に察して、決めてしまうことが多過ぎます。

木下 アメリカでは、そうした問題はかなり解決してきているようです。ただ、障害者を乗せて、何か緊急事態が起きたときに、パイロットとしては全責



木下茂徳氏

任が持てるかと考えてしまうわけです。例えば、非常脱出口の大きさを直してもらわなければ、緊急着水のときに、脱出口から出られない障害者に責任を負えない、といった論争がかなりありました。緊急着水の場合に、脱出口から脱出できない障害者は機内に残すことになりかねない、それではパイロットとして困るという考え方もわかります。しかし、そこに、まだ話し合う余地があると思いますね。脱出口にしても、一気に出なくても、2段構えで出るようにするという方法は、いろいろとあると思います。

秋山 駅の改札口にしても、もう8cm広げれば車いすが通れるんですけどね。

岡 ストックホルムは、地下鉄は大半の駅に車いす用のエレベーターをつくっていますが、一般の改札口はふつうの幅で車いすは通れない。乳母車と車いすが来ると、駅員が改札口のすぐ横の幅の広い口をあけるようになっていきます。一般の改札口を余り広げるのは、2人同時に入ってしまうなど、いろいろと問題があるようです。ですから、車いすが来たら、駅員が横の口をあけてあげればいいと思いますね。

秋山 狭いということでは、ホテルのユニットにな

っているトイレとかバスの入口が車いすで入れない。部屋の1割ぐらいは、車いすも通れるユニットのものをつくってほしいわけです。障害者の方は、みんなと一緒に旅行するのが楽しみの一つですから、これからそうした需要はふえると思います。改札口からホテルまで、大きな設備やお金をかけなくても、みんなちょっとした工夫でできると思うんです。ただ、そのためには障害者の方の生活をもっと知らないといけないことなんです。そこを抜きにして、画一的にパッパッと決めないでほしい。駅の改札口でも、車いす専用の入口をつくるか、それとも車いすが来るたびに脇をあけて通すか、いろいろな方法があるわけです。

岡 障害者が健常者と共存して生活していく場合に、いろいろな摩擦が生じてくるのは当然だと思います。国電の駅のサイレントタイムの例もそうですが、かつて「天声人語」の深代惇郎君(故人)が、数寄屋橋交差点の交番のスピーカーがうるさ過ぎる、お節介過ぎると書いたら、たちまち目の不自由な方から、あのスピーカーの声を頼りに渡っている、という反論がきて、深代君が困っていた。警察は良かれと思ったのですが、やかましいことも事実です。そこで、目の不自由な人にもプラスになり、しかも目の見える人にはうるさ過ぎない妥協の道を、知恵を使って考えればいい。

木下 日本などは、いくらでも細かい技術が発達していますから、それを応用すれば、いろいろなやり方があると思います。目の見えない方に補聴器のようなものを付けてもらって、その機器にのみキャッチできる情報を送るといったことも可能です。日本は電子技術が非常に発達していますから、そうした成果を生かして、障害者対策の幅といますか、選択の可能性を広げていくことは、困難ではないと思います。

岡 それほどお金もかかりませんね。

木下 プラットホームからの転落防止も、赤外線を利用したり、アンテナのようなものを張って、そこから出ると警報が鳴るようしておくとか、アイデアはいろいろあります。しかし、なかなか実施してくれないということです。

岡 結局、そうした技術を使うにしても、障害者の方の心とか、要求を本当にくみ取って理解してこなかったわけですね。

木下 そうです。ニーズを的確に受けとめることができないんです。

岡 1978年の国際シンポジウムに、フランスから車いすの人で、身障者社会参入促進協会の会長を招いたんです。その人は、生まれて9か月で小児麻痺になり、母親の力で学問を身につけ、ナンシー大学のそばに母子で住み込んで、大学に通ったわけです。フランスの大学は身障者を拒んではないが、実際問題として、施設も何も整っていないから、身障者は通学できなくなっていたそうです。そこで、その人は大学卒業後、障害者の社会参加の運動を始めたんです。彼が日本で特に強調していたことは、とにかく発言して、意志表示しなくてはいけないということでした。行政は黙っていても理解してくれるだろうと思って、絶対にやってくれないと、くり返し行ってましたね。

秋山 私も以前から、障害者は発言しなくてはいけないと考えていましたが、最近は、言い過ぎるというか、自分の権利の主張が強過ぎる方もいますね。これでは、みんなと共存していけないと思うんです。

田島 理想的には、お互いに相手の立場を思いやり、理解し合えば、トラブルはないと思いますけどね。それが、気やすくできると一番いいんですが、過保護と無視がまだ多い。過保護は、やはりトラブルがあったら困ると思う一心から出てくるのでしょう。横目でチラッとながめる程度にして、障害者が困ったときに気軽に声をかけてきたら、気やすく手をかしてあげればいいんです。もっとも、声をかけても2人に1人は知らんぷりして行ってしまいますね。私の経験では。

秋山 無視する人がいても、くり返していただきたいわけですね。

田島 くり返しますけど、「次はどこ行きの電車が入るんでしょ」と聞いても、2人に1人は知らん顔です。相手が向こうを向いて歩いていて、気がつかない場合もあると思います。あまりひがみっぽく考えたら収拾がつかなくなりますから、そう思っています。

4. 車いすに乗って交通環境の見直しを

岡 これまでの話では、施設や形は整ってきたが、どうもおかしな点があるということですが、これから先しなくてはいけないことは何でしょうか。

秋山 お役所の縦割り行政を改めてほしい。関係するところは、運輸省も建設省も厚生省も文部省も一緒になってプロジェクトチームを作り、もう一度障害者問題を検討し直すことです。その中には必ず障

害者の方を入れ、その人たちの意見を十分聞くことです。

岡 木下さんはいかがですか。

木下 一定のやるべき、基本的な線はかなり出ていると思います。結局、行政が縦割りであるがゆえの矛盾が、末端にたくさん出てきているわけです。そこをいかに調整し直していくかが、最も重要な問題だと思います。

田島 いまの役所の仕事を見ていると、障害者から何かいわれると、あわてふためいてやっている感じがします。それが拙速でやるから、あまり有効でなかったりする。例えば、歩道の縁をかいて、車いすが上げられるようにスロープにしても、半数以上の人はスロープがきつ過ぎて上げられないことになる。ある程度遅くなくてもいいから、時間をかけて障害者とよく話し合ってほしいですね。

岡 施設だけに目がいくと、心に期待しなくなるし、心に期待しないから、無限に施設をふやしていかなければならないということになってしまう。

田島 ハレモノに触れるような対策ではなくて、もっと腹を割って、普通の人間と同じだ、ということで行政を進めてほしい。根本は心ですよ。

秋山 心は教育の原点から育てていかないと。いま教科書問題がいろいろいわれてますが、小学校の教科書に車いすなんて出てこないと思いますよ。

岡 小学生でも、一回車いすに乗せてやるといい。私も、車いすの方と一緒に車いすに乗って歩いたんです。すると、田島さんのいわれるように、歩道のスロープが、いかに上がりにくいかわかりました。

秋山 一度乗ってみるといいですね。「人間コンサート」のときに、テレビやラジオでボランティアの希望者を募ったら、当日、東北大学の学生がたくさん来たんです。その女子大生たちが帰りに、「初めて車いすに触れ、そのたたみ方を知りました。これから町で車いすの人に会っても、どうしてあげたらいいかわかりました。ありがとうございます」って、感動していました。それから、大分の小学校でも、4年生を車いすに乗せてあげたら、みんな喜んで、目を輝かしているんです。そして喜びながら、車いすで外へ出ることが、どんなことかよく分かってくるわけです。

木下 小さい子どもは、車いすに乗ると喜ぶますね。そういうところから、車いすの人を知ってもらいたいでしょうね。

岡 乗ってみてわかりましたが、歩道のスロープで

も、建設省の基準では勾配は5度以下のはずですが、その基準を破っているケースがたくさんある。どうしても登れないから測ってみたら、10数度の勾配だったりするんです。

田島 ですから、申し分け程度に作って、使う者の立場を考えていないというわけです。

木下 お役所の方も、1日車いすに乗って、町を歩いてみるといいですね。車いすにすわって見る交通環境は、かなり違って来るはずですよ。例えば、車いすから見ると、信号機のバックにネオンサインがオーバーラップして、非常に見にくいという信号機の高さがたくさんあります。ところが、普通の人の高さでしかネオンの位置を規制しなくて、車いすの視点は全く注目されていないわけです。

岡 子どもの高さでないとダメですね。

秋山 この間ベニスに久し振りに行って、ゴンドラに始めて乗って低い所からベニスを見たら、今までの印象と全く違うんです。そのとき、日本の政治家も、国会の高見でものをいっているのはダメだ、町へ出て、車いすに乗り、子どもの高さになって町を見てもらいたい、とつくづく思いましたね。

木下 車いすに乗って町を見れば、政治の理念もかなり違って来るでしょう。

岡 やはり、頭だけでものを考えてはダメですね。歩道のスロープの例でいえば、私は歩道の幅いっぱい全部スロープにするのは反対です。車いすの幅だけスロープにして、スロープと車道の境は平らに仕上げるべきです。そうすれば、目の不自由な人は段差のあるところで待てるし、健常者も段差のあるほうが待ちやすい。そうしたスロープを最後までつけなかったのが銀座でしたが、一昨年、せっかくの御影石をはがして、全部スロープにしてみました。そのとき、工事責任者の東京国道工事事務所の人に会って、どうしてスロープは車いすの幅だけに、後は品のいい歩道を残しておかなかったのかと聞いてみました。彼は、そんなことをしたら車いすの人が、そのスロープの幅のところを探すのに苦労するというんです。苦労するというのは、彼の想像にすぎないと思うけど、その程度で歩道の縁石をみんなスロープにされ、おまけに車いすの人にも、健常者にとっても快適でもなく、便利にもなっていない。

木下 スロープにする前にやるべきことがいくらでもあります。歩道の敷き石はデコボコで、目の不自由な人にはすべって歩きにくいし、雨になれば水た

まりになって足がぬれてしまう。まず、舗道の敷石を平らに直さなくてはいけないのに、スロープのほうばかりワーワーいわれるから、そちらにかかりきりになってしまうんです。これも頭で考えるため、車いすに一度乗ってみれば、そのあたりの矛盾がよくわかると思いますよ。

田島 自分が使ってみて、始めてわかるんです。

秋山 それでは、権力をもっている総理大臣を始めとして、厚生大臣とか労働大臣とか運輸大臣、建設大臣あたりを車いすに乗せて歩かせる運動を始めましょうか(笑)。

岡 国際障害者年の最後の締めくくりに、それやってみましょう(笑)。どうもありがとうございました。